

心の危機と近代化のひずみ

港道 隆

こんにちは。甲南大学人間科学研究所の港道です。僕は過去の五年間の学術フロントティア事業の活動には一研究員として関わってきただけでした。中心的な構想は森さんと斧谷さんにお任せして、僕はただ頼まれたときに頼まれた仕事をやってきたにすぎません。しかし今回、新しく人間科学研究所を開所するにあたって、斧谷さんにかわって心理学以外の責任者をせよと指名されまして、にわかには全体構想の場面から何らかの貢献を求められることになりました。

人間科学、ヒューマンサイエンスと言っていますが、学問イコール科学ではありません。ヨーロッパ哲学には認識論という議論があります。その有力な一つの考え方によれば、科学というのは、概念としての対象を作り出して、世の中に起こっている現象の一部を切り取る認識活動です。その点からすると、いわゆる人文科学あるいは社会科学系の中で、科学になったのは経済学と言語学しかないといわれています。それでは科学でない学問は科学と比べて遅れているのか？ そうじゃなくて、学問の性質上、科学にならない学問というの

があり得るだろう。たとえば僕がやっている哲学は特定の対象を持っておりません。ですから科学的認識にはなりません。だからといって価値がないのか？ いや、科学という認定を受けなくても厳密な学問というのにはずであるし、これからもあり得るだろう。これが人間科学研究所が「人間科学」として考えていこうとする立場です。

今日から始まる研究プロジェクトも、今までと同じように臨床心理学を中心にして行われることは事実ですし、それでいいと思っています。しかし僕自身はかねがね、臨床心理学の現場から現れてくるさまざまな問題を心理学的に議論するだけでは不十分だと考えてきました。臨床の現場から出てくるさまざまな問題は、われわれが生きているこの社会の複雑でマクロなあり方の一効果だからです。したがって僕は、問題を取り巻く社会的なコンテクストを重視するような関わり方をしたいと述べてまいりました。その結果、成立したのが今回の新たなプロジェクトです。「現代人の心の危機の総合的研究・近代化のひずみの見極めと、未来を拓く実践に向けて」という長いタイトルが付いているんですが、ここでは「心の危機と近代化のひずみ」という略称を使わせていただきます。 「近代化のひずみ」というのは、ヨーロッパ近代化が日本社会にもたらしたものです。今回のプロジェクトは、われわれが差し当たって直面している様々なひずみ、矛盾をどう問い直すかという試みであります。近代社会が一つの曲がり角を迎えているというのは、もちろん日本だけのことではありません。人、お金、物、情報がいわゆる近代国民国家の

境界線をやすやすと超えて流出・流入するこのグローバル化・シジョンの中で、世界全体が構造的な変容を被りつつあります。その流れの中で、世界中で新たな不正と暴力が作り出され、しかし一方では、同時にポジティブな新たな未来の可能性も垣間見えてきています。このようなコンテクストにおいて社会を問い、明治以来の近代化の結果としてどん詰まり状態になっている日本の社会を分析し、世界的な転換点から新たな可能性を探っていくことが、われわれのような職務に就いている者の急務の責任だと考えています。

そこで今回は七つのテーマを選びました。そのうちの四つについては、来年度から年一回、シンポジウムを開催していきます。心理臨床を中心にした「トラウマ概念の再吟味」、「育てることの困難」、「心理療法」という三つのテーマと、もう一つ心理系ではない「感性の変容」というテーマです。これらのメインテーマに加えて、その傍で立ち上がってくる問いの社会的な背景を分析するために、三つの補助的なテーマを選びました。「高度成長を生きた子供たち 戦後効率主義の帰結」、「二つ目が「アメリカの在り方とグローバル化」シジョン」、「三つ目が「性的差異の社会的未来」というタイトルをつけたサブテーマです。僕の役割は、むしろサブテーマが何を意味しているのかということをご理解いただくといいことですので、それについて簡単に申し上げたいと思います。

第一番目の「高度成長を生きた子供たち 戦後効率主義の帰結」では、何よりも家庭 日本の場合ですな 家庭、

学校、社会をつなぐ子供たちの問題がメインにあります。ヨーロッパで生まれた近代の、いわゆる集団教育は、社会を再生産し維持していくために必要な技能を持った人材を育成する面と、市民社会や国家の在り方を自由に批判的に選択していく市民を育成する側面と、この二つを兼ね備えています。しかし日本の場合、市民の育成という面が非常になおざりになって、もっぱら人材の尺度と見なされた学歴を中心に教育が構造化されてきました。実は効率主義といいながらも、ちっとも効率的ではない現象をいっぱい生み出しているわけですね。効率主義は数限りない逆説的な現象を生みながらも、すべてを損得で判断するという価値観を子供にまで一般化させてしまつて、さまざまな差別や文化的差異に対する無感覚を生み出し、社会に対する批判的な関わりを欠如させ、倫理感覚を鈍化させていきます。単に学歴社会といつて済ませるのでなく、その根底にある価値観の問題について、一度鋭い分析を行つてみたいと考えています。

第二番目の「アメリカの在り方とグローバル化」シジョン」では、タイトルからおわかりのように、現代の世界におけるアメリカの存在をどう考えるかを問題にしようと思つています。現在進行形のイラク戦争を見るまでもなく、われわれは今日、民主的、政治的、経済的な力と利益を独占しつつあるアメリカの問題を避けて通ることはできません。いわゆるグローバル化シジョンが新卒の西洋化、欧米化あるいは極端な場合にはアメリカナイゼーションという方向に引張られて、自由市場の拡大が新たな貧富の差を作り出す、新たな不平等

を作り出すという状態になっていきます。こうした流れに抵抗する動きは世界中にあるわけですが、日本の場合には非常に少ない。しかし、そういった傾向をどのように阻止していいのかが問われています。ヨーロッパではもう乗り越えられ始めた「国民国家」という非常に古い形では、この世界は動かないということがはっきりしている。「国民国家」に還元されない正義、社会正義を追求する新たな連帯のようなものがあり得るとしたら、それは一体何なのか、その可能性を模索していきたいと思っております。

第三番目の「性的差異の社会的未来」についてですが、もちろんフェミニズムをはじめとする社会運動や学問的批判が今日まで蓄積した成果ははっきり存在します。日本の社会も少しは変わってきました。少しは、です。そういった成果も踏まえてさらに、性的な差異 必ずしも男女とは限りません、そこにおける社会的な正義を追求するためには新たに何をなすべきか、何をなし得るのかを問題にしていこうというわけです。性的差異の問題というのは、あらゆる社会問題に横割りに入ってくる性質のもので、例えば黒人が差別されているといっても、黒人の内部でも性差による差別があり得ます。そうすると差別は二重になりますね。ですからこの問題はすべての問題、すべての研究テーマに横割りに入ってくる汎通的なテーマです。たとえばイラクに行くと人を殺している軍隊の中に、男女平等を唱えて女の人が入っていく。これは男女平等という観点から一体どう考えたらいいのか？ 性というのは人を殺す軍隊の中でも平等なん

だろうか？ こういう問いがいくつも立ってきます。日本社会に限定しても、老人介護や保育所問題などの具体的な問題をどうしていくかという時に、古い、ジジイの、男中心社会の発想では立ち向かえません。そういった現状を踏まえて、いったい僕らはどういったメッセージを発信していけるのかを模索していきたいと思えます。その点では甲南大学人間科学研究所のメンバーになっていただいた方々には、この問題に関して適任の方が多くいらっしゃいますので、このテーマを巡る研究成果には非常に期待しております。

最後に、共同研究プロジェクトの活動計画を申し上げます。まず、来年（二〇〇四年）から年一回のシンポジウムを行い、その成果をその都度、論文集の形で公表していく。これが一つの柱です。四つのメインテーマでのシンポジウム、論文集という流れですね。それから、三つのサブテーマに関しては小さめの研究会を積み重ね、その成果を論文集にする。これが二つ目の柱です。年次計画は少々ややこしいことになっているんですが、要は二本立てで活動が進むということですね。

三つのサブテーマうち、「高度成長を生きた子供たち 戦後効率主義の帰結」は、（メインテーマである）「子育ての困難」に合体させて行いますけれども、論文集としては分離して刊行することになっております。「アメリカのあり方とグロバリゼーション」については来年度から勉強会を始めまして、再来年度には論文集を出す計画です。で、この年には

同時に「性的差異の社会的未来」の研究会を本格化して、最終年に論文集の出版にこぎつけようと思っております。四つのメインテーマ、これから話していただく「トラウマ概念の再吟味」、「感性の変容」、「子育ての困難」、「心理療法」については森さん、斧谷さん、高石さん、横山さんが中心になって活動を進めてまいります。けれども、三つのサブテーマ「高度成長を生きた子供たち 戦後効率主義の帰結」、「アメリカのあり方とグローバリゼーション」、「性的差異の社会的未来」については、具体的に何をどのように設定し論じることが可能なのか、われわれの方で明確なビジョンを持つていくわけではありません。とりあえず僕が呼びかけ人になりまして、近く参加者を募り準備会合を開いて、それぞれのリーダーを決め、具体的な活動の方向を決定していこうと思いません。もちろんお一人が複数のテーマに参加して下さっても構いません。今日これからの場では話をお聞きになって、自分も具体的にこのついう方面に加わりたいと思表示をしてくださるならば、それに超した幸せはありません。